人の目は気になる。全くひとりは怖いが、人と積極的につきあうわけじゃない。そんな感じの人が多い。

社会の格差が拡大する中で

一方に積極的でやる気のある団塊ジュニアの女性たちがいて、一方には大人になりきれず、またがんばることもしたくない人の一群がいる。

もちろんいつの時代にも、適応のいい人たちと適応の悪い人たちがいることには変わりはないし、積極的な人と消極的な人がいることも変わりはないだろうが、以前とは変わってきたと思うことがひとつある。それは親の暮らしにはそれほど差がない人たちの間でさえ、そのようなやる気の「差」によって生活にも大きな格差がつこうとしている、ということである。

適応がよく将来が期待できる人たちと、親が病気になったらどうするのだろうと危惧せざるを得ない人たちの、それぞれの親の生活をきいてみると、殆ど変わりはない。団塊ジュニア世代の親は、そろそろ定年を迎える普通のサラリーマンと専業主婦の組み合わせが大半である。いうまでもなく、この人たちは高度成長を支えた元祖「団塊の世代」である。この年代の男性が生きてきたのは、能力があろうとなかろうと就職がきまればそれなりに生活が組み立てられた時代である。高校でも大学でも、学校を出て就職すれば、家族を持つ計画が描ける時代があったのである。

けれども、今はそうではない。一方にＩＴ長者のような若い世代のサクセスストーリーもあれば、他方では、ちょっと、ぼんやりしていると、成功できないどころか、今まで自分が暮らしてきた生活レベルから簡単に脱落してしまうこともある。怖い時代だ。フリーターでは家族を養うだけの収入はなかなか得られないから、そういう人には、独身者が多くなり、ずっと親の家の一部屋に住むことになる。将来設計も立たない。年齢が進めばよい仕事にもますますつけなくなる。でもそこで競争や挑戦から降りてしまっても、無収入でも、餓死するわけではなく、生活は何とか成り立っていく程度の豊かさが社会にはある。だったらそれでいいや、と考える人がいても不思議はない。

団塊ジュニアからさらにその下の世代まで、このような変化は続いていると思える。最初に述べたように精神医学や臨床心理学は、人がうまく生きられない原因として、個人の特性や家族の個性に原因を求める傾向が強いのだけれども、若い人たちの就職や結婚などの問題に関しては、個人の特性というよりは、もっと大きい社会の変動が影響していることをひしひしと感じることが多い。実際、定職をもてず、将来の計画も描けないままに、コンビニや工場でアルバイトしている若い人の相談に乗ると、暗澹とした気持ちになることがある。

多くの人がこのような変化に気づき、指摘している。たとえば２００５年に出版され、そのネーミングで話題になった三浦展による「下流社会―新たな階層集団の出現」（光文社新書）などもその典型だろう。これまでは大多数の人が、普通にがんばれば、自分がそれなりに成功したと思えて、家族もでき、将来計画も持てるという社会だった。しかし、いまでは、競争から降りない人と降りてしまう人に二極化され、降りない人はますます激しい競争にさらされ、降りる人は、将来の展望が持てず、結婚も出来ない社会になりつつあることが、この本では説明されている。フリーターは今全国で２００万人を超えるそ